

広瀬淡窓より見たる雲華上人の人間関係

——「雲華院釈大含信慶講師年譜稿」補遺——

湯谷 祐三

一 雲華上人の研究と広瀬淡窓の日記資料の価値

雲華上人(一七七三—一八五〇)とは、高倉学寮講師として江戸後期の東本願寺教学の頂点を極める一方で、同時代の頼山陽や田能村竹田・浦上春琴・小石元瑞らと京都で華々しい詩書画一体の文芸交流をした事で知られる豊前中津の僧侶、雲華院釈大含信慶講師のことである。

雲華は当時の京都文人ネットワークの中心に存在しており、その生涯を明らかにすることは、雲華だけでなく、雲華と交際した様々な文人の事跡をつまびらかにする上でも有効である。そうした観点から、筆者は雲華生涯の事跡をまとめた「雲華院釈大含信慶講師(雲華上人)年譜稿」を公刊し(『寺社と民衆』一〇号、二〇一四年四月、以下「年譜稿」、具体的事例として雲華と田能村竹田との交際の一部を考察した(「雲華上人との交流と田能村竹田の画業」本誌四九号所収)。今後、頼山陽など、他の文人についても検討していきたいと考えている。

こうした事例は、従来あまり注目されていなかった雲華関係資料によって、他の文人の知られざる側面が照らし

出されるというものであるが、一方雲華自身の活動についてはどうだろうか。雲華が京阪神で文人として顕著な活躍を見せるようになるのは四十代後半の文政年間以降であり、天保期前半にそのピークを迎えるのであるが、それ以前の文人雲華が形成される過程の詳細については必ずしも明らかでない。

雲華は安永二年(一七七三)に竹田満徳寺に生まれ、天明十二年(一七八四)十二歳で実父円寧と死別して、父の兄である日田広円寺の円門法蘭師のもとで成長した。そして寛政三年(一七九二)十九歳の時に実姉の夫である中津正行寺の学僧頓慧鳳嶺師(嗣講、没後贈講師)の後嗣として同寺に入り、翌年には京都高倉学寮にも入学している。以後、主に宗学を積み重ねたようである。二十五歳ですでに著述をものし、『十四行偈記』二卷・『六合釈講演』一卷、二十代後半には自坊や府内光西寺などで講義を行うようになっていた。趣味の墨蘭画もこの頃開始したようである。

こうした雲華の生涯を明らかにする基本資料は、雲華の漢詩文を活字翻刻した赤松翠陰編『雲華上人遺稿』(昭和八年、以下『遺稿』)であり、先の「年譜稿」もこれを中心に、未刊の漢詩稿や頼山陽・田能村竹田などの諸資料を加味して作成したものであるが、如何せん、雲華の漢詩文が中心であるため、その制作が活発になる享和元年二十九歳以降はともかく、十代の日田時代、二十代の中津時代など、雲華の学芸のルーツと言える時期については五里霧中の観がある。

しかるに、ここにその欠を補う好資料がある。それは日田に生まれ、門人総数四千を数えると言われる江戸時代最大の私塾咸宜園の創始者、広瀬淡窓の記録である。淡窓には儒学書・道教書や塾の諸規則から、自身の漢詩集など様々な著述があるが、最も規模の大きいのは、『淡窓全集』全三卷(大正十五年、以下『全集』)の各巻に所収された一連の日記資料である。そこには旺盛な好奇心・的確な観察・客観的な視点・精彩あふれる叙述が見られ、淡窓と咸宜園の重要な記録というに止まらない、一流の日記文学としての普遍的要素が備わっている。

淡窓の日記資料は大きく二種類に分かれる。一つは、自叙伝と目される『懷旧樓筆記』全五十六巻で、天明二年

の誕生から天保十六年(弘化二年)の六十四歳までの記録である(『全集』上巻)。文中で雲華について「大谷ノ講師ニ任シ」と記しているから(寛政三年条)、少なくとも、雲華が講師を拜命する天保五年以降に手が入っていることは明らかである。片仮名を使用した仮名文で詳細な叙述に富む。

もう一つは所謂「日記」全八十二巻で、七篇に分かたれ、「淡窓日記」以下「甲寅新曆」までそれぞれ七つの篇名がつけられているが、混乱を恐れ本稿ではこれらを一括して「日記」と称する。これは淡窓三十二歳の文化十年八月二十三日に始まり、没年七十五歳の安政三年二月二十一日に至る間の日録である(『全集』中巻・下巻)。

『懷旧樓筆記』文化十年八月二十三日条に「(日記は)但戊戌己亥ノ二年、故アリテ記録ヲカケリ」とするが、現状では戊戌(天保九年)・己亥(天保十年)の日記は存在している。「日記」はすべて漢文体であるが、無味乾燥な事項の列挙ではなく、詳細的確な情報を多く含んでいる。

以上、二種類の資料を総称して本稿では淡窓の日記資料と呼ぶ。本稿の記述は、主に『懷旧樓筆記』から抄出した雲華関係記事の抄訳を骨格として、そこに「日記」の情報を補ったものである。これに雲華の『遺稿』や「年譜稿」などを組み合わせて、従来知られていなかった雲華の事跡や、雲華周辺の人士の実際の風貌と交流の実態、雲華の肉親、特に実子に関する事柄などを紹介する。「年譜稿補遺」と副題する所以である。以下に淡窓が記述する事象は、九歳の年齢差はあるものの、雲華が同じく体験した、あるいはそれに近似したものであろうことをふまえて読んでいきたい。西暦の併記は紙幅の都合により論旨に影響のない部分では原則として省略した。

なお、雲華の総名は「雲華院釈大含信慶」という。雲華院は自分の雅号をそのまま院号としたものである。僧名の釈大含は俗人の字に相当し、他人が雲華を呼ぶ時の名であるから、淡窓は通常大含と表記し、一部雲華院を使用する。信慶は実名で、他人がこれを使うことは通常ない。後述の「宗旨改帳」では信慶の署名が見られる。雲華の義父は「皆往院釈頓慧鳳嶺」で、雲華の甥であり早世した後嗣は「聞喜院釈大有広慶」であるから、雲華以降、「大」と

「慶」が正行寺における「通字」になったと考えられる。

二 江戸後期日田の学問の状況

天明九年、八歳の淡窓は、父親から教えられていた四書の授読を終え、父に連れられて長福寺の「住持法幢上人」に謁見して『詩経』の句読を受けた。上人は自ら教えることは少なく、その当時、長福寺に出入りしていた椋野元俊が代理として教授していたため、淡窓はついに椋野に弟子入りし、長福寺と豆田の椋野宅の両所で『詩経』『書経』『春秋』を受業し、父からは『古文真宝』を授かった。元俊は当時二十歳余りで、名医椋野元瑰の息子であった。椋野からは『蒙求』の句読も受けていたが、さらにこの年、豆田室町の住人である四極先生こと油屋三郎兵衛より、その「義理」を聞いた。長福寺や椋野宅の受業は句読のみだったのである。椋野宅の同学としては長善寺玄海や大超寺心随などがある。

寛政三年、淡窓は四極先生に連れられて、広円寺の法蘭上人に謁見した。上人は肥前の大超^{マツ}禪師(大潮禪師)の弟子で、江戸では服部南郭にも入門し、若い頃には相良文之進の父泰安と共に『豊城濫吹』二巻を刊行、また自身の詩集『銭塘詩集』二巻も刊行している。この法蘭師については淡窓は、「此人ハ教授ヲ事トスル人ニ非ス」とする。この当時、広円寺には「学寮」があり、つねに複数の雛僧が寄宿していたようであるが、おそらくその中では、先輩の僧侶や近隣に住む学僧などが下級僧に宗学の初歩などを教授していたと考えられる。雲華も広円寺にあって、伯父である法蘭自身から宗学を手取り足取り教えられたというよりも、そうした学問環境の中で自然に宗学の基礎を修得していったのではないだろうか。淡窓の師である松下西洋の門下生なども広円寺学寮に滞在していたと後に記されており、こうした寺院の「学寮」において、仏学のみならず、儒学・詩学等をも含めた濃密な学問的雰囲気醸成があったと想像できる。法蘭はこの年六十四歳で、大潮会下同門の亀井南冥も兄事していた。法蘭の祖父

(休玄)及び父(道寧)も文学の名誉が聞こえていた。

さて淡窓は、寛政二年冬より、久留米藩医の養子で故あって妻子を捨てて出奔し、当時広瀬南家の土蔵に寄宿していた浪人松下勇馬(名は夷、字は世民、西洋と号す)にも師事したが、翌寛政三年よりそのもとで詩字を開始した。一日に七絶一首を課題として、ついに二百首に達し、次に五律に取りかかった。また淡窓は、他の弟子十人ほど『十八史略』の会読も行っているが、そのなかに前述の椋野元俊や釈心随と並んで、「釈大含(豊前人)」とあるのは、淡窓の日記資料における雲華の初出として注目される(〽)は割注。

淡窓は続けて「大含ハ後ニ豊前正行寺ノ住持タリ。大谷ノ講師ニ任シ、声名地望、一時ニ顕赫タリ。予カ同友中最顕レタル者ナリ」と記す。雲華の高倉学寮講師就任は天保五年八月であるから、淡窓のこの記事はそれ以降に記されたものである。この年、雲華は十九歳で、実姉の夫である中津正行寺の学僧頓慧鳳嶺師の養子となった年だが、日田における会読に加わっているところを見ると、居を完全に中津に移したわけではないことがわかる。

翌寛政四年、西洋先生の門下生高橋・吉田の兩名が、そのころ名声が鳴り響いていた筑前の亀井南冥に入門することになり、淡窓の父も淡窓成長のおりには入門を希望する旨伝言し、許容された。また、長福寺宝月師の子で、現住法幢師(日蔵)の弟であり、幼時に肥後八代光徳寺に養子に入ってその住持となった法海師(月蔵)が、この頃筑前に南冥を訪ね、南冥はその才能を称賛して七律七首を唱和した(南冥詩集にあり)。淡窓父子は長福寺に滞在していた当時二十四歳の法海師を訪ね、自宅にも招き、淡窓は自作の五律の添削を受けている。その後も法海師が日田に留錫のおりには必ず訪ねたという。法海師はその後高倉学寮の講師となっており、その死後雲華が講師に就任したが、雲華の昇進には、同郷の親しい学僧である法海師の意向も強く働いたと考えられる。

しかしこの年の秋、亀井南冥は罪を得て蟄居し、他郷の者を家に泊めることも禁じられたので、四方からの遊学生は皆離散した。松下西洋の門下生高橋も日田に戻って来て、『国語』の会読をしたが、亀井塾のやり方で、そ

の激論は淡窓を驚かせ、会読の雰囲気は以前と一変した。松下先生が高橋の進歩を称賛したので、淡窓の亀門遊学の希望は益々高まった。この頃、松下門に遊学する人々はみな広円寺の学寮に滞在したという。

寛政五年、十二歳の淡窓は松下門にあり、四極先生にも往来していた。この頃、「詩会」が時々あり、淡窓もこれに参加した。その上首は常に法蘭上人で、松下先生も参加した。会者は六七人から十人である。会所は広円寺・長福寺・長善寺などで、浄満寺・護願寺・相良東嶽宅・淡窓宅でも行われた。法蘭上人の長男である円什師の内室妙信院（阿信）は府内光西寺の出身で、漢詩をよくし、広円寺が会所である時は出席して匿名で法蘭の批評を受け、しばしば「甲」と評価された。その人となりは風神洒落であったが、円什師に先だつて没した。

長福寺の宝月師も日田の名家であり、初めは法蘭師と名を等しくしたが、淡窓が法蘭師のもとを訪れていた頃には京都に滞在しており、その後、病を得て帰郷し閑居した。詩会にもたまには出席し、淡窓も時に訪問した。四極先生は漢詩を作らず、相良文之進は「極テ異風」な作詩であった。淡窓はこの頃、『明七才子集』を範として擬作し、法蘭師より添削を受けていた。この年の春から、文之進の長男で淡窓より五歳年少である清記（館林清記）が淡窓宅に寓居して、淡窓から句読を受けた。

寛政五年の冬、四代にわたり日田の代官をつとめた揖斐氏から羽倉氏に代官職が代わったが、その前年の冬より、江戸から勘定方の平岩治郎兵衛らがやって来て、豆田の者に経書の講釈を聞かせよと命じたため、法蘭師が長福寺で月に三度の講義を行った。隈町もこれに倣い、宝月師を招いて講義を始めた。平岩氏が帰東してからすぐに止んだが、この頃は白河侯時代より遠からず、文学を重んじる風儀が残っていたと淡窓は述懐する。ここで注目したいのは、「経書の講釈」に呼ばれたのが、真宗の学僧であったという点であり、僧俗を含めて、広円寺の法蘭師と長福寺の宝月師が日田の漢学の頂点に位置づけられていたということがわかる。

寛政六年九月十三日に法蘭師が六十七歳で示寂した。弔問した淡窓に内室は水滴を遺品として贈った。法蘭没後、

その文集上梓の計画があったが、ついに実現しなかった(文集は現存の由、筆者未見)。高橋昌彦氏「寛政期の豊後日田漢詩壇」『雅俗』八参照)。

淡窓幼少時の日田の遊び場としては、第一に大原八幡宮がある。ここでは毎年八月十三日から十五日に放生会があり、多数の夜店が出る。城内の観音閣にもしばしば登り、家族一同で通夜したこともある。また、羽野の妙見宮や金比羅宮にも遊んだ。東は会処宮八幡・本宮八幡、隈川より南は越原観音・鬼城観音・普門寺・釜淵・穴平・護願寺等に遊び、西北は吹上観音・岳林寺に遊んだ。以上が、淡窓が亀井南冥に師事するまでの日田の学問状況である。「四書五経」から『古文真宝』『蒙求』『十八史略』へと進む漢籍学習の道筋や、漢籍は句読を先習して、その後に「義理」が授けられること(講釈)、漢詩の作風としては、「明七才子」が重んじられており、江戸中期荻生徂徠に発する護園派の影響を色濃く残していたことなどがわかる。

三 福岡の亀井一門の状況

こうして、法蘭師は亡くなり、松下西洋も佐伯に仕官して、二人の師を失った淡窓は茫然と日を送っていた。父の勧めもあって佐伯に西洋を訪ねたが、藩儒となった西洋に他郷の子弟を個人教授する余裕はなかったろう。

寛政七年九月、淡窓が四極先生を訪ねると、そこに三人の客がおり、その中の一人が下関の医師藤玄雄の次男である藤左仲であった。淡窓は左仲について、永富独嘯庵の兄の子で、亀井南冥の弟子であるとす。淡窓より十二歳年長で、大典禪師について文辞を学んだこともある。その性格は反覆常なきものであったが、口を極めて南冥を褒めそやすので、淡窓はついに来年左仲に同道して南冥を訪ねる決心をした。淡窓の父も左仲のことはよく思っていないかったが、南冥を訪ねることについてはこれを許した。以前、寛政四年に日田を訪れた亀井の牧園文哉が亀井父子に淡窓の才能を語ったことから、亀井父子は淡窓の存在を認識していたという。

寛政八年八月、左仲の先導にて筑前に亀井父子を訪ねた。その途次、秋月にて原震平と面会する。これが淡窓と震平の初対面であろう。八月十六日、淡窓は福岡唐人町の亀井家を訪ね、亀井昭陽に入門した。昭陽は安永二年生まれの二十四歳で雲華と同年、淡窓より九歳年長であった。南冥は蟄居して旅人との面会を禁じられており面会できなかった。さらに淡窓は左仲に連れられ、昭陽の弟の大年を姪ノ浜に訪ねた。大年、名は萬、時に二十歳であった。医を業とし、才気抜群で詩作もよくした。眼光鋭く、雪のように色白の美男子である。

八月二十日には、やはり左仲と博多へ行き、南冥の実弟である永寿庵曇栄禅師を訪ねた。曇栄、名は宗暉、幻庵と号す。もと博多崇福寺の住持であったが、南冥排斥の一件に連座させられたのか、今は退院している。年齢は四十八歳で詩と書をよくした。詩は南冥より優れると言われ、書は頼春水と並び称されたという。

寛政九年、淡窓十六歳、南冥先生は五十五歳で容貌魁偉、およそ亀井家の人はみな眼光炯々として人を射るようであった。盛時、塾には六十余名の生徒がいたが、淡窓入門時には十人に過ぎず、南冥蟄居の後、江上源藏(名は源、字は伯華、荅洲と号す)が甘棠館の教授となった。初め南冥はその長女を江上の妻にしようとしたが、江上は辞退した。後年、江上は南冥と子弟の情を無くした。

江上の下に三人の訓導がいた。山口主計・後藤主税、そして昭陽である。山口は後に民平と改めた。名は豊、字は士沛、唐津の人である。南冥より二十歳年少で、後に南冥の次女を娶った。亀井家とは終生厚情であった。後藤は筑前の医者で南冥より十歳年少であった。

甘棠館の結構は美麗であったが、淡窓はその玄関を見ただけで館内を見たことはなく、その翌年には回禄してしまった。淡窓が入門した頃は、昭陽が早朝朝食前に『礼記』『周易』『尚書』『孟子』などを講じた。三日に一度は夜中に会読があり、出席者は十四五名だった。月に文会が三度、詩会が三度あったが、これに出席する生徒は十人を超えなかった。

当時南冥は閑居して医を業としており、弟子を教育することはなく、詩稿を筆削するぐらいいだった。淡窓は詩は南冥に、文は昭陽に斧正を乞うた。この年の八月に大年は村井椿寿などと面会するため、柳川・久留米・田代・唐津を経歴して肥後に遊び、後にその紀行を詩文各一卷にまとめた。この年の冬には、塾生は皆帰郷し、残ったのは医事の弟子一人と、儒生は淡窓一人であった。

寛政十年、十七歳の淡窓は福岡に残って亀井父子に仕えて春を迎えた。他郷での迎春はこれが初めてである。正月中には日田に帰郷したが、淡窓の帰郷中の正月二十九日に福岡唐人町より出火し、折からの烈風にて延焼、師家及び甘棠館は一時に全焼した。淡窓はすぐに見舞いに駆けつけたが、唐人町は一面の焼け野原で、亀井父子はその瓦礫の中に席を設け、門生たちと痛飲していた。南冥は時に立って舞い、昭陽は酔って臥していたが、淡窓を見ると起きて状況を語った。淡窓は福岡から戻り、秋風庵で蕭然と日を送った。

その後、西学である甘棠館は廃され、竹田春庵が朱子学を教授する東学に一統され、西学の儒生四人は皆免職されて平土に落とされた。淡窓が福岡に戻り、唐人町に南冥を訪ねると、先生はそこにおらず、姪浜の大年と同居しているとのことだった。昭陽は妻の実家である姪浜の後藤屋の隣の土蔵を借りて、甘古堂と号して寓居しており、淡窓もその玄関に留まった。

ところで南冥の次男は僧侶となつて宗嵩と名乗っていたが、その頃帰郷して還俗し、儒と医を業として甘木で開業していた。名は昇、字は大壮、雲来と号した。昭陽の紹介で淡窓は大壮と面会した。年は二十四歳でやはり容貌魁偉、弟の大年と伯仲する才学であった。亀井三兄弟のうち、昭陽のみ容貌醜く、他は俊美であるとは、淡窓の興味深い観察である。

寛政十一年、十八歳の淡窓は姪浜で正月を迎え、二月に帰郷した。日田に帰ると相良文之進が疫病で没した。享年四十二歳。淡窓の従姉妹でもあるその未亡人と三人の子(清記十三歳・伊織八歳・女児二歳)は広瀬家南家に寓

居した。

この年初めて原震平が日田に来訪し、淡窓宅に滞在した。五月には館林清記ともう一人を連れて筑前に行き、亀井に入門させた。淡窓が姪浜に着くと、昭陽が出迎え、夢に淡窓が二人を連れて来るのが見えたという。この地も疫病盛んで、伝染を恐れた淡窓は二十日ほど滞在して六月十五日に辞去した。その日は博多の祇園会で、淡窓は早朝から見物に出かけた。九月上旬、淡窓が筑前に戻る頃、淡窓の従姉妹である清記の母もまた疫病で没した。ここ数年淡窓は病弱で、特に冬に熱を発するため、寛政十一年十二月上旬には帰郷した。そしてこれが「大帰」(退塾)となった。筑前で過ごしたのは二年に満たなかった。本当は五六年も滞在し、その後四方に漫遊したいと思っていたが、すべてかなわなかった。

南冥先生は教育に長じていた。人の才能を愛するその性格は天性のもので、人の長所のみを見て短所を言わなかった。先生には酒乱の癖があったが、西学が廃された後は、更にはばかることがなくなった。永富独嘯庵門下で先生と同門の小石元俊(元瑞の父)の話として、道載(南冥)などを京都の儒者と同じように見てはならない、猛虎のようなものだということだった。

昭陽も剛毅なることよく父の風があり、生涯娼妓に近づくようなことはなく、父の死に際しては三年の喪に服した。ただ、才子を輩出したという点では父に及ばなかった。昭陽も文人書生を愛したが、俗人は全く相手にしなかった。また異学の人も交わらなかった。

次男の大壮は兄弟の中では寛容な性格だった。最初は出家して叔父曇栄禅師の弟子となったが、本意を得ずに還俗したことで、叔父とは生涯交際しなかった。医術については三男の大年に見劣りしたが、淡窓とは馬が合い、大壮が甘木にいた時には、淡窓はよく訪ねて滞在した。淡窓が病床にある時は大壮が見舞いに来てきた。

三男の大年は英気高く天性豪快で礼節にこだわらなかった。姪浜に別居して医術を業とするようになると、もつ

ばら商売人や博徒と交わり、袴を着けた者、すなわち士大夫を喜ばなかった。文化九年、大年は三兄弟の中で最も早く三十六歳で早世した。遺稿三巻がある。

淡窓は筑前滞在中、南冥の実弟である曇栄禅師をしげしば訪ねた。曇栄の詩文は大典禅師に習学したため、亀門の家風とは同じではなかった。また出家であるから穏やかな人物ではあったが、やはり英気に勝る人であって、それで世に容れられず、崇福寺を退院に及んだ。後年、同寺の月海禅師が冤罪を訴えたため、退院の罪が晴れたという。曇栄は南冥・昭陽とは親しく交際したが、大壮とは例のいきさつから不通であり、大年も大壮に味方して、詩作でこの叔父を誹つたという。その内容は、晩唐の詩を称揚する曇栄を陳腐だと批判するものであったが、これによって、曇栄が晩唐の詩風を愛好していたことがわかる。曇栄には『禪月楼集』二巻二冊、『雲水詩集』一冊がある。

淡窓の詩風は、最初は法蘭師と松下西洋の指導を受けたもので、ここでは『明七才子集』『絶句解』『滄溟集』などを祖とし、荻生徂徠・服部南郭・万庵(原資)・大潮を宗とするものであった。唐詩はただ『唐詩選』のみで、李白・杜甫・王维・孟浩然の集も見たことがなく、中唐・晩唐の詩などは勿論知らなかった。

十五歳の冬に独居してやることがなかったので、宇都宮由的の『杜律標註』を読み、その味わいを覚えた。そのことを左仲に語ると、杜律は初学者の読むものではないと言ったが、淡窓が自身批点を加えた『標註』を見せると、自分も初めて詩の味わいというものを知ったと驚いた。その後、筑前に遊び、南冥先生の詩を学び、同門諸先輩の詩体を模倣したが、亀門の詩作は享保の諸家と大同小異であった。原震平(古処)や大年は青蓮(李白)を学び、大壮(雲来)は子美(杜甫)を学ぶところであった。

十八歳の冬に姪浜に居た時、本屋が『唐宋詩醇』を持参したので、大年が購入した。淡窓が読んでみると、李白・杜甫・韓愈・白居易・蘇軾・陸游の六家が撰ばれていた。淡窓は幼時の師説により、宋詩を魔道邪法と思っていたので、「唐宋」と並び称されていることが意外であった。淡窓は初めて詩道の広大なることを知り、明と盛唐以外に

中唐・晩唐があり、また宋があり、それらはすべて捨て去るべきでないことを悟った。そして、蘇軾と陸游の詩を讀んでその味わいを愛した。

享和三年、二十二歳の時には淡窓も『詩醇』を購入して熟讀し、自身の詩作の傾向も一変した。六家の中では最も陸游を好み、二十七八歳までの詩作は多く陸游を学んだものである。文政二年正月、淡窓は初めて陸游の詩を講じている。

後に、松下西洋先生が亡くなった年の条で(文化七年)、淡窓は先生の詩体について、昔は明体であったが、亡くなる五年前に日田を來訪された時には、近時江戸で南宋の詩体が流行していることを言われ、仕官する佐伯侯もそれを好むことから、君命により先生も陸放翁(陸游)に習って詩作すると聞いたことを記録している。

以上が、淡窓の二年に満たなかった亀門下での見聞である。雲華は亀井一門の各人と昵懇にしており、淡窓の記す亀門各人の風貌は、雲華の詩作を理解する上でも貴重である。また、淡窓がこの時期に宋詩に開眼したことも注目すべき証言であろう。

雲華は文化三年(一八〇六)に南冥門下戸次宜春に疊韻した七律で「学唐詩偈拾睡余、取捨人間意自如、安擬居山禅月跡、聊同讚仏道林廬」と、「唐詩」を学んでいることを表明し、唐末の禅月大師貫休を意識していることを示しているが(『遺稿』二〇頁)、文政元年(一八一八)秋頃に清末の渡辺澄(東里)に贈った七絶では、「北元南宋多真際、寧及唐明妄語兒」(『遺稿』一一三頁)と宋詩を称揚しており、この期間に雲華の詩風もまた「一変」したことがわかる。

その後、享和二年八月に淡窓は四年ぶりに福岡に赴き、南冥の六十歳を賀した。その頃には亀井父子は姪浜を去って福岡に転居し、西新町に新宅を構えていた。元の唐人町の宅の西南十町ほどの所である。

文化十一年三月二日、南冥先生が逝去された。淡窓は早速弔問に出発し、二十一日墓前に詣でた。曇栄禅師にも會

い弔辭を述べたが、禪師は憔悴しており、その後兩三年を経て示寂された(文化十三年十月二十五日)。この人も当世の詩人であったが、その詩集が上梓されず、その実力ほどに世間に名が知られることがなかったのは残念であった。南冥先生が蟄居されてから二十余年、淡窓が在塾の頃は酒にふけり佯狂の体であったが、徐々に錯乱の度合いを加えておられた。近來は穏やかに起居していると聞いたが、本宅の隣にある先生の隱宅から出火し、昭陽が火中に飛び込んで運び出した時には既に事切れていた。自殺か他殺かと一時紛糾した。雲華は昭陽から遺品として鵬鈕の銅印を贈られ南冥を偲んでいる。

四 豪潮律師の日田来訪

寛政十二年、十九歳の淡窓は魚町の父母のもと、北家楼上の東の部屋で療養していた。和訳の『陰騭録』を読んで善事を心懸け、部屋の壁には名家の墨跡を貼り、南冥先生の送別詩を表装して、その前で香を焚くという生活であったが、正月二十三日に嘔吐して発作が起こり、それより伯父の秋風庵に移って療養した。大壮が見舞いに訪れて滞在した。三四月の頃、肥後の倉重湊という醜貌の医者 of 助言により病が治まった。この時の大病は全くひどいものであったが、父母は家業に忙しく、専ら伯母と二歳年下の妹「阿良」(現在「アリ」と通称される)の二人が寢食を忘れて淡窓の面倒を見たのである。病治まって後は、岳林寺や護願寺などに遊んで保養に務めた。

この年の秋冬に肥後の豪潮律師が日田を訪れ、広瀬家の菩提寺でもある浄土宗大超寺に留錫した。淡窓の日記による限り、これが豪潮最初の日田来訪であった。この人は一向宗の子弟であったが、天台宗に入門して律僧となり、持律堅固であると共に加持靈驗に優れ、帰依する者が多かった。かつて京都では時の天皇に授戒したという(寛政二年、光格天皇か)。この頃肥後に滞在していたのを日田の羽倉代官が招いたのである。代官所の命により淡窓の父がこのことに当たり、淡窓も大超寺で豪潮と面談した。五十三歳の律師は豪放磊落な人柄で、弁才もあり人情にも

通じていて、その人柄に接する人は自然に帰依してしまうのである。律師は数日間日田に滞在した。

豪潮の日田滞在中には、その説法を聞き、加持を受ける人が遠近より雲集し、毎日騒がしかった。淡窓の父も特に帰依しており、淡窓の病弱を心配して、加持を受ける人が遠近より雲集し、毎日騒がしかった。淡窓は加持を受けたが、信心薄弱なため徹底しなかった。そこで、妹の阿良が代わって加持を受け、信女となった。後年彼女が出家の願を起こしたのもこの時から始まったのである。律師は準提(准胝)観音の呪を持しており、律師の信者はその法を伝えるものが多い。淡窓も父の命によりこれを伝えた。

その年の冬にも、豪潮は日田を訪れ、護願寺に留錫していた。それを聞いた淡窓は訪問して一宿した。淡窓が日田で他所に泊まることはほとんどないが、ここは幽僻の境地で奇縁であった。この寺は往古大寺であったが、中頃退転し、今はわずかに存している。本来静かなところだが、律師が来訪して、とたんに騒がしくなった。

寛政十三年(二月に改元して享和元年)、二十歳の淡窓はあるいは魚町で、あるいは秋風庵で悠々と療養していた。二月に甘木へ行き、大壮に両度の見舞いを謝した。丁度、南冥先生が滞在しており謁見した。それから秋月に原震平を訪ねた。この年、『楞嚴経』を読む機会があり、仏教思想の高大精微なることを知った。また秋風庵にあって『老子国字解』を数遍読み、老子が好きになった。

享和二年、二十一歳の淡窓は水岸寺(修験の寺)密如の依頼で『孟子』の講釈をした。それまで淡窓は句読を人に教授したことはあったが、講釈はこれが初めてであった。諫山安民・館林伊織・広円寺の法珍など六七人が参加した。この年の冬に、羽倉代官の招きにより豪潮律師が日田を再訪し、大超寺に滞在した。後には城内の永興寺に転居し、明年の冬まで滞在した。十二月より淡窓の病状が悪化し、すべての講釈を辞退して南家後園の土蔵に独居して専ら持呪・齋食を守って日を送る生活が翌年の春夏まで続いた。

享和三年、この年は麻疹が流行し、淡窓も五月末から六月始めまで罹患した。半月ほどであったが、症状は激烈

で、土蔵に閑居する淡窓を見て、妹の阿良は自分の命を淡窓の命に代えようと発願し、毎日永興寺に行き、豪潮の加持を受けた。妹が誓願した日、豪潮は妹を呼び止めて、その志願をずばりと言いつた。帰宅後、妹は出家の決意を家族に語った。父も豪潮師に帰依していたので、妹の決意が固いことを知るとついにこれを許したが、淡窓の病気が癒えると、妹の出家を喜ばず、それを遅延した。

豪潮師の信者に、京都の官女風早氏という方がおられたが、その方がお付きのものを求めているというので、妹はそれにお仕えするということになった。出家しないという条件で父母も快諾し、七月に妹は中津より乗船して上洛した。風早氏は妹を気に入り、自身の妹にする旨、日田に伝言したので両親も安心した。これより妹は秋子と名乗った。妹の京都の居所は、やはり豪潮の信者であった菱屋源兵衛方である。その冬、豪潮師は肥後に帰った。淡窓が豪潮に会ったのはこれが最後となったが、文政十三年から翌年にかけて豪潮は彦山に滞在しており、淡窓の父母は淡窓の手紙を持って登拝している。淡窓との文通は豪潮晩年まで続いた。

さて、雲華の漢詩における豪潮の初見は、文化十一年秋頃の「寄呈豪潮律師二首」と題する七絶二首であるが〔遺稿〕八六頁)、これは必ずしも実際の面談を意味しないのかもしれない。何故なら、天保五年に雲華が豪潮に呈した七言古詩には、「我曾庶幾一瞻仰、有因初見彦山巔」とあり〔遺稿〕二〇一頁)、これによれば雲華は彦山の山頂で豪潮に初見したことになる。雲華が彦山に豪潮を訪ねたのは、「訪豪潮律師在彦山」という五律がある文化十四年夏秋頃である〔遺稿〕一〇二頁)。この詩中には「渴仰亦多年、偶引登山杖」とあることから、豪潮の高名は聞いていたものの、実際に対面するのはこれが最初だったと読みとれる。文化十四年が初見であるとすれば、前述文化十一年の七絶二首は対面して呈したのではなく、遠方から送付したものと推測される。以後、雲華と豪潮の交際も豪潮の示寂まで続き、幾度かの面談と、書簡や詩文、古玩の贈答などが行われた。

五 長福寺の学寮

文化元年、十九歳より五年間を療養と称して逼塞していた淡窓は二十三歳となり、いよいよ今後の身の振り方を思い悩むようになった。しかるに、庚申の大病以来、親しく交際している肥後の医者倉重湊が、この冬日田に滞在していたため、この人ならば良い智慧を授けてくれるのではないかと手紙を書いたところ、全く返事がない。直接訪ねてみると、倉重は手紙を投げ出して、「これは全く『離騷』の文章だね。くどくどとした繰り返し言で前に進まない。君はいつから屈原になったのだ」と手厳しい。そして、「君の進むべき道は一つしかない。それは日田にあって儒学の教授をすることだ。それで窮するなら飢え死にすればよい」と明確に答えた。これで淡窓の道が決まった。

淡窓が追憶するに、自分の交遊において裨益された人物は二人いる。一人は亀門に導いてくれた藤左仲であり、もう一人はこの倉重湊である。ただし、この二人の人となりは決して君子と言えるものではなかったが、淡窓にとつては世間一般の篤志家よりも遙かに有意義で明確な助言を与えてくれた恩人なのである。淡窓は年明け早々にも開塾すべく準備に取りかかった。

文化二年、二十四歳の淡窓は、父母と同居してはいけないという倉重の助言により、豆田の長福寺の学寮を借りて、三月十六日に転居した。淡窓と同居するのは諫山安民と館林伊織の二人である。学寮には楼があり、上下合わせて二十畳であった。三人で飯を炊いた。淡窓が講説を業とするようになったのはこの時に始まる。

長福寺の法幢師は、淡窓が幼時に句読を授かった人であり、その父宝月師も同じく幼時にしばしば付き従ったことがある。法幢の養子である東海とは今回知り合った。長福寺内徳善寺の素龍は俳諧を好み、伯父や父と親しく、淡窓とも幼時より面識があり、学寮に寄寓するに当たり、よく周旋してくれた。その二子である昇道・賢杖も淡窓の弟子となった。学寮の北隣には三松斎寿（もと相良梅岡）の家があり、朝夕往来した。倉重も淡窓の開業を聞き、市中の父兄に広く告知したため、入門者が増えた。水岸寺の密如も長福寺で日々講説した。また羽倉代官の子息左門

(後の簡堂)も聴講した。

淡窓は長福寺に在る時に「書会」を始めた。五言詩を一句書き、その字の美醜によって点数をつけ、甲乙に分ける。数十日もすると市中でも大いに流行し、男女およそ百二三十人が参加した。今に到るまでおよそ四十年続いている。長福寺には三月から六月まで滞在したが、旅の僧が学寮に留錫するため、淡窓は再び魚町に戻り、南家後園の土蔵で講説した。学寮での講説は僅かに百余日であったが、この時に入門者が多くなり、開業の基礎が出来た。七月十七日、京都の菱屋宅にて秋子が病没した。

この年の冬、長福寺の宝月師が示寂した。六十九歳であった。この人も大潮禪師の門人で詩文に長じた。中年からは仏学に従事し、本山の擬講に抜擢されたので、文辞の名誉は薄れたが、それでも日田の名家であった。淡窓も時々参上したが、教えを受けることはなかった。その詩集二巻が蔵されている。宝月師の「姫島詩」、南冥先生の「麿島詩」、井県少助の「舟中詩」を世に九州三絶と称する。宝月師の長男の法幢師は文化十年春に示寂した。年齢は五十六歳であった。この人は法海師の兄ではあるが、その才学は懸隔している。しかし頗る好人物で、また佯狂にして世をもてあそぶの風もあった。詩作も好み、今に得難い人物である。

以上が、長福寺における淡窓の開業の経緯であるが、雲華と長福寺の大師との関係も深い。雲華の義父頓慧師が正行寺に入ったのは宝月師の紹介によるものとされる(『豊絵詩史』)。法幢・法海の兄弟とも昵懇で、法幢は淡窓の観察によれば風流隠士のごとくであるが、文化三年八月から九月にかけて、その法義における「異安心」の問題で京都の本山に召喚されており、雲華はそれを見送っている(『遺稿』一五頁)。念仏の教義にも一家言ある人物だったのである。法海も雲華とは生涯親しく、天保五年八月七日に法海講師が示寂してすぐ、同月二十五日に雲華は講師を拜命するのである。

六 淡窓の記録する雲華の活動とその人脈

淡窓の日記で直接雲華について言及する記事としては、前述の寛政三年の『十八史略』会説参加の記事が最も早いものであるが、その次に大舎の名を見るのは、文化三年、魚町に移った淡窓塾に入門した豊前の僧大龍について、正行寺大舎の紹介により入門したとする記事である。この大龍は松江正法寺の僧で西本願寺派であるという。東本願寺に属する雲華が、淡窓塾に紹介するほど西派の僧と交流があったというのは興味深い。ちなみに他国の入門者としても大龍が最初のことである。

文化五年、淡窓はかねて菅茶山と交流していた旧知の箕浦東伯(秋月藩医、もとの佐谷龍山)に自作詩を託して茶山の評を乞うた。時に芸州に遊んだ館林清記が備後に行き茶山宅に滞在した。茶山は評を記した淡窓の詩を清記に託した。五月十四日、清記は更に頼山陽の評も乞うて持ち帰った。山陽は一見して、「晚唐の風韻、三都の時調(宋詩のことか)と迥かに別なり」と評したという(木崎愛吉著『頼山陽全伝』文化五年条)。これが淡窓と菅茶山・頼山陽の交際の始まりであった。淡窓は「頼子成評予詩卷見貽、賦此寄謝」と題して謝辞を返した(『遠思樓詩鈔』巻二)。ちなみに雲華が頼山陽と初見したのもこの文化五年である。

文化六年五月、淡窓は眼病治療のため、須恵の田原眼科を訪ねることとなり筑前に向かった。その途次、福岡に入り五年ぶりに亀井父子に謁見し、昭陽の娘小琴とは詩の応酬をした。更に、博多の松永宗助(豪商、花通と号す)を訪問すると、ちょうどそこに大舎が逗留しており、淡窓は旧知の雲華との思いがけぬ出会いを喜んだ。

このおり、浦上玉堂の子春琴も博多に滞在しており、淡窓は春琴とも初見した。春琴は後年、主に京都で雲華と密接な文雅の交際を持つに至る。雲華の詩作における春琴の初見は文化九年の「寄紀一郎春琴」であるが(『遺稿』六五頁)、淡窓は、「大舎・春琴・順光・宗助・梁平同シク送予。箱崎ニ至リ…」と記していることから(『全集』上巻一五九頁)、この文化六年の博多滞在時に雲華と春琴は既に面識を得ていたと考えられる。雲華はその後生涯唯一

度となった長崎行に出かける。十一月二十六日付の淡窓宛雲華書簡(『広瀬淡窓旭窓書翰集』一一頁)において、雲華は淡窓の眼疾を気遣い、「筑前すへ」での療治の具合を尋ねているから、この書簡はこの年文化六年のものと思われる。

文化十一年の冬から翌年の春にかけて、淡窓の記録に大舎の名が頻出する。十月十一日に大舎が淡窓宅に立ち寄り、同月十六日には大舎を桂林園に迎えて会談しようとしたが故あつて果たせず、翌十七日には夜に大舎・三松齊寿らが来訪、緑水亭で小酌の後、齊寿宅で茶を喫し、帰宅したのはほとんど四更であった。その翌日、十八日には長福寺に参詣し、大舎を訪ねて別れを告げた。また十一月三日には鳳洲家(雲華の花友)に託して、『国朝詩別載』を大舎に返却している。

いったい、この時の雲華の日田滞在の目的については明証を得ないが、この冬雲華は、「本堂募縁経東西二谷」(詩題、『遺稿』八七頁)と、本堂建造のための募金に奔走している。また、「従遊家巖侍日田之行」(詩題、『遺稿』八六頁)ともあつて、養父鳳嶺に侍して日田に赴いているようだ。淡窓の詩に和韻した十二月の作と思われる詩にも、「近年山寺事経営、土木金錢奈雅情」とある(『遺稿』八七頁)。よつて、この頃の雲華が本堂建造のための募金活動に忙殺されていたことは間違いない。

翌文化十二年三月二十四日には、『虞初新志』『国朝詩別載』『南遊紀行』に『東園雜詠』を付して大舎に返却、翌日二十五日には雲華が淡窓宅に立ち寄つており、雲華の日田滞在が確認できる。この年、雲華が易行院法海師に寄せた漢詩の中で、「土木誤生涯」や「土木程功計未開」などと、やはり土木の苦心を伝えている(『遺稿』八八・八九頁)。雲華の日田滞在には、本堂普請のための資金調達のもつたかもしれない。

文化十三年、三十五歳の淡窓のもとに、正行寺から大有が入門した。二月十三日の日記には「釈大有入門(大舎嫡子)」とある。筆記には「大有ハ正行寺大舎ノ養子ナリ。已ニ歿セリ」とあるように、大有は雲華の実子ではなく、

雲華の実兄で竹田の満徳寺住持である円黙の子であったが、大舎に実子がいないことから後嗣として正行寺に迎えられるのである。『頼山陽全伝』の同年同日条に「この日、雲華の子大有、山陽塾へ入門」とあるのは誤記ではないか(同書四〇一頁)。十八日に淡窓は大舎へ書状を出しており、おそらくその内容は大有の無事入門を知らせたものと思われる。三月十九日の日記には「夜大有告別」とある。今回の大有の日田滞在はわずか一ヶ月ほどであったが、その理由として、九月に示寂する正行寺頓慧鳳嶺師の病臥もあつたか。

九月三日、雲華は日田にあつたが、淡窓宅に立ち寄ることができなかったと伝えている(日記)。九月七日には正行寺の鳳嶺師が示寂しており、その危篤を知って急遽中津に帰還したのであろう。淡窓は九日に逝去の知らせを受けており(日記)、中津の情報が一週間の日田に伝わっていることがわかる。十二月三日にも雲華は日田に滞在しており、六日には筑後の西福寺で講演している。

文化十五年、四月に改元して文政元年、淡窓三十七歳。府内光西寺の僧円琛が入門した。その父は華光院といい、広円寺法蘭師の次男で、高倉字寮の嗣講であつた。淡窓の記録を総合すると、法蘭師には少なくとも四人の男子があり、長男が円什一環、次男が華光院円光嗣講(円解)、次に法天、そして末子が法珍である。広円寺は法蘭のあと、円什・法珍と継承されたようだ。

長男の円什は字を一環といい法輪院と号した。南冥とも詩文のやりとりがあり、『甘露室詩集』一卷を残す。天保七年十月五日示寂。淡窓とは幼年より四十余年の親交であつた。華光院円光は府内の大寺である光西寺に入った。『光西寺史』等多くの資料では華光院を円解とする。円光は円解の前名か。円解は雲泉と号して絵もよくした(天保十一年示寂)。雲華と仲の良かった法天は文化三年に早世した(『遺稿』一九頁)。法珍は文政六年十二月七日に京都で示寂した(日記)。三十四五歳であつた。文化十一年二月十日、広円寺主法珍妻逝去とあるから、この時点では法珍が住持であつたようだ。法珍は文政三年九月十七日に子を亡くしているが、おそらくそれによって実子の後継が

なくなつたようで、文政十二年九月十五日、広円寺住持となる円智(円知)が咸宜園に入門したが、これは雲華の実兄円黙(竹田満徳寺住持)の実子であつた。

さて、文政元年に戻ると、十一月三日、生涯只一度となつた九州旅行中の頼山陽が日田に入り、八日には館林清記が同伴して淡窓を来訪、酒食を共にし、山陽は秋風庵に泊まつた(日記)。山陽は日田におよそ一ヶ月滞在し、十二月五日に中津へ向けて出立した。淡窓は実際の山陽に接して、「徳太郎其才力遠く父ノ上ニ出テタリ」とその学力を高く評価する一方、「徳太郎ハ当世ノ名家ニオイテ第一流ナリ。余眼中ノシル所、此人ヨリオアルハナシ。唯其人トナリ簡傲ニシテ礼ナク、又利ヲ貪ル。是ヲ以テ至ル所、人ニ悪マレ、往々ニ其地ヲ逐ヒウタレタリ。惜イカナ」と、その個性の強い行動とそれに対する世評を的確に観察している。

一方の雲華にとつてもこの年はまことに忙しい一年であつた。二年前に義父鳳嶺師を亡くし、名実ともに正行寺の主となつた雲華の「新生」となつた年である。下関での山陽との邂逅と別れ、江戸滞在・富士登山・内室の逝去・鳳嶺師三回忌・田能村竹田との面談・法蘭師展墓(没後二十五年)、そして十二月中旬の頼山陽との山国川探訪(山陽が耶馬溪と命名)などをこなし、十七日に山陽を見送つたその三日後の十二月二十日、雲華は淡窓宅に立ち寄つている(日記)。二十四日にも雲華は淡窓と蕎麦を食している。二十五日、淡窓は雲華のために富山詩を写している。

年もおしめたこの時の雲華の日田来訪は、広円寺での所用もあろうが、淡窓とこの一年の出来事を語りあうことも大きな喜びであつたろう。なかんずく、先日面談したばかりの頼山陽との交流や、夏の富士登山など、話題は尽きることがなかつたはずだ。

文政二年の閏四月中旬から五月にかけて田能村竹田が日田に滞在し、前年の頼山陽との出会いと語らいの一件を記した『卜夜快語』を淡窓に進呈した。竹田と淡窓はこれが初見と見られるが、山陽の話題で盛り上がったことだろう。竹田と雲華が享和二年以来の旧知であることは既に報告した(本誌四九号)。竹田の子太乙は竹田の画業の弟

子となる帆足熊太郎(杏雨)と共に文政七年咸宜園に入門している。

文政三年七月二十三日、秋月の原震平(古処)が娘采蘋を連れて来訪した。采蘋は時に二十三四で、幼時より読書文芸を学び、詩作に長じていた。その所作は磊落で男子のようであり、酒もまたよく飲んだ。後に江戸に行き、詞林の世界で名を知られたという。雲華は、采蘋が月琴をよくしたことを詩に詠んでいる(『遺稿』一五四頁)。震平は九月十六日にも隈町におり、雲華は十九日に淡窓を訪ねているから、雲華と原古処も面談しているのではないか。翌月、古処は娘を連れて正行寺に雲華を訪ねているが、雲華不在で会えなかった。ちなみに雲華と震平の初見は、雲華と南冥が初見した享和元年であろう(年譜稿)。

文政五年、淡窓四十一歳の正月晦日に伯父が逝去する。日記によれば、伯父の葬儀が行われた閏正月朔日に釈大舎が立ち寄ったとあり、やはりこの時も雲華は日田に滞在していた。三月十四日、法海師が淡窓宅に立ち寄ったが、雲華は三月以前、法海と葦北郡日奈久に宿っている(温泉あり)。法海師は日奈久の近く八代の光徳寺住持となっていた。五月十八日、後に淡窓が「門生数千のうち第一の奇人」と評し、雲華の教えも受けた黒木光善寺の石門徳令(二十歳)が入門する(天保二年九月十三日大婦)。文政八年正月十日にも雲華の日田滞りが確認できる(日記)。天保三年は頼山陽逝去の年である。この年の雲華と田能村竹田の動向については既に報告した(本誌四九号)。雲華は、正月三日に山陽を一日二度も訪問した後、九州に下り、二月二十九日から三月二十九日まで、一ヶ月の間、日田に滞在した(日記)。その目的には、この年十月に実現する一子慶端の咸宜園入門の相談なども含まれるか。更に八月二十二日から九月二日までの日田滞りが確認できる(日記)。

そして十月一日、「釈慶端入門、大舎子也」(日記)として、雲華唯一の男子である慶端の咸宜園入門が記録される。この慶端こそ、雲華が東山の舞妓お露との間にもうけた男子であり、東山で成長した後、十歳で正行寺に入り、五月五日生まれであることから幼名を重五といい、この端午の「端」と父大舎信慶の「慶」を合わせて「慶端」と

名付けられたであろうことなど、既に小稿で考証した（拙稿「雲華上人の魅力を再評価したい」『中外日報』二〇一四年五月十六日、以下「小稿」）。

慶端は文政三年生まれで入門時十三歳であった。既に正行寺には後嗣として雲華の実家である竹田満徳寺より大友広慶が迎えられており、慶端が咸宜園に入門したまさに同じ頃、大友は田能村竹田を正行寺に迎え、およそ一ヶ月の間、酒食を共にして歓待していた（『竹田莊師友画録』大有の項）。しかし、大友は翌天保四年十月二十八日に急逝する。

十一月一日、淡窓は頼山陽の急逝を知った。山陽が没したのは九月二十三日であるから、およそ一ヶ月余りで情報が伝達されたことになる。ちなみに雲華は十月二十二日に山陽の訃報に接しており、すぐに中津を發つて十一月十三日には京都の頼家を弔問している。

天保四年二月二十二日、法海師が日田を来訪する。四月十三日には、旧塾生でもある正行寺住持の大有が淡窓を訪問する。これは恐らく、在京の雲華に代わって入門半年余りの慶端の様子を見に来たのであろう。しかし前述のように、大有はこの十月に急逝する。天保六年九月二十三日に淡窓は豪潮律師の示寂を知る（閏七月三日寂、八十七歳）。淡窓は前年五月二十九日にも書簡を出しており、豪潮とは生涯文通していた。九月二十五日には田能村竹田の逝去を知る（八月二十九日没、五十九歳）。天保七年五月十七日、亀井昭陽没（六十四歳）。昭陽の学識は南冥のはるかに上であったが、世上の名声が父の半分にも及ばないのは、数百巻に及ぶ著述がほとんど上梓されていないためだと淡窓は嘆く。

さて、天保七年十月十四日の日記に「釈慶端過訪」とある。天保三年の入門時以降、「大婦」の記事は見えないが、慶端は既に塾を離れていたのである。それは恐らく、天保四年十月に住持大有広慶師が急逝したからであろう。正行寺蔵の天保七年『宗旨御改寺内門前帳』にはその筆頭に「年十七 廣探」とあり、その「廣探」を見せ消ちにして

「慶端」と傍書しており、この年既に慶端は雲華に代わって正行寺の住持になっていたと考えられる。慶端の日田來訪の目的は、十月五日の広円寺円什師の示寂を受け、在京の雲華に代わり広円寺を弔問するためであろう。

天保八年二月二十九日、淡窓は大塩平八郎の一件を知る(二月十九日決起)。天保四年八月九日に、淡窓は旧門生松本九藏より、その師大塩の『洗心洞笈記』と大塩の伝言を受け取っていた。『笈記』には感心しなかったという淡窓であるが、この事件の顛末と大塩については詳しく記述しており、さらにこの頃の飢饉や物価高騰の実態も継続して記録するなど、そうした社会情勢については全く沈黙する雲華と対照的な姿勢を示している。天保九年十月十七日から二十七日にかけて淡窓はしばしば大舎を訪ねており、この頃の雲華の日田滞在がわかる。淡窓は前年刊行された『遠思楼詩鈔』を雲華に進呈した。

そして、天保十一年八月二十九日の淡窓日記に次のような注目すべき記載がある。「積五岳来。介豊前僧大弘入門。及同国僧惠白來訪(惠白旧門生也)。居広円寺(大弘。大含孫。大有子也)。小酌呼範治陪焉。」(『全集』下巻七四一頁)。門生であり、後に画僧として著名になる平野五岳(聞慧)を紹介者として、大舎の孫で大有の子である大弘が入門したというのである。

この大弘について、先の小稿では、正行寺の寺伝(前住御内室のメモ)に「広慶、その子大弘(慶瑞)亦早く没す」とあることから(『遺稿』「雲華上人伝」二二頁がその典拠であろう)、大弘と雲華の実子慶瑞とは同一人物ではないかと考えたが(慶瑞は慶端の誤記であろう)、淡窓日記の記述を読む限り、慶端と大弘は別人と考えるのが自然であろう。淡窓塾の入門簿(『全集』下巻)を参照すると、慶端と大弘のそれぞれの記載は、「天保三壬辰十月初日豊前下毛郡古城正行寺 積慶端十三才 積円智」、「天保十一年庚午八月二十九日豊前古城正行寺 積大弘十二歳 積聞慧」とあり、これをもとに二人の生年を計算すると、慶端は文政三年(一八二〇)生まれ、大弘は文政十二年(一八二九)生まれとなる。両者には九歳の年齢差があり、やはり別人と見なさざるを得ない。

大弘が慶端ではなく、淡窓の記す通り大有の実子であるとすると、文政十二年、十歳の慶端が父雲華に連れられて正行寺に入ったまさにその年、大有の実子大弘が生まれていたことになる。この大弘という名は、一連の『宗旨御改寺内門前帳』や現在の墓石には見られず、それらについて別に考察するところがあるが、紙幅の都合でここでは立ち入らない。

その後、日記の天保十二年十月二十四日条に「恵白・大弘除名」とあるが、除名の理由については何も書かれていない。天保十四年二月十六日には、「雲華院」が淡窓宅に来訪した。同年三月十六日条には、「釈道樹・釈慶端・及び体賢父来訪」とあって、ここに慶端の名前が再び現れる。当時彼は正行寺の住持であった。この来訪の目的は翌十七日に挙行された法蘭上人五十回忌法要への参加であろう。

弘化二年九月六日、京都における雲華の盟友である医師の小石元瑞（六十二歳）が、病気の久留米侯に随行西下の途次、淡窓を訪ねた。弘化四年六月十六日の日記には「竹田僧円宗入門（満徳寺新発意）」とあり、この円宗は満徳寺円黙の孫で、円等の子である。

そして、日記の嘉永三年十一月八日条で、「聞雲華院死（円宗・五岳所伝、似非妄、年七十八、予幼時同学人最著者、莫如斯人、惜哉、臥疾数年、終京師云）」と、淡窓は遂に雲華の示寂を記すこととなった。雲華の死亡日については十月の七日（墓石）・八日（大谷派学事史略年表）・九日（上首寮日記）の三説あるが、淡窓は雲華の死を約一ヶ月遅れて知ったのである。

以上、淡窓の日記資料から、雲華上人の人間関係に関する情報を拾い集めてみた。今後は、こうした事実関係をふまえて、雲華や淡窓を輩出した日田の漢文学の伝統、雲華と亀井一門、雲華と豪潮との交際の詳細について、それぞれの漢詩作品の読解を通して具体的に明らかにしていきたいと考えている。